大学における学習者コミュニティーの形成
Making Learning Communities at College

―第7回ホール・ランゲージ国際大会に参加して―

師子鹿　元　美

―A Report of the 7th International Whole Language Umbrella Conference―

Motomi SHISHIKA

はじめに

7月31日から8月4日の5日間ミネソタ州セントポール市内のホテルをメイン会場にして行なわれたホール・ランゲージ国際大会に参加した。アメリカ全土はもとより南米，カナダ，オーストラリア，台湾，韓国，日本，イギリス，エジプトなど世界各国より200名を超える教師，研究者，学校管理者などが参加した。日本からの参加者は筆者と筆者の友人のアリゾナ大学博士課程在籍中の大学院生の二名であったが，大会は始終違和感を感じることなくスムーズに議論に入っていける和やかなムードであった。第2日目からは朝8時から夕方5時まで分科会，研究報告，実践報告などのプログラム（資料－1参照）がぎっしりと予定されていたが，どの会場も盛況で活発な意見交換，討論が行なわれていた。

参加者の大半は小学校，中学校の教師，それもほとんどが女性であった。ホール・ランゲージに基づくカリキュラム作りを始めたばかりの教師，ホール・ランゲージ教師として何年も経験を積んだ人，学校全体の教育方針としてホール・ランゲージ運動に取り組んでいる教師，学校の伝統的教育方針のなかでホール・ランゲージ理論を実践しようと頑張っている教師と置かれている立場，段階はさまざまであるが，みんなホール・ランゲージの教育理論，教育哲学のもと教育はどうあるべきかについて悩み模索しており，その真剣さと熱意に圧倒された5日間であった。本稿では今大会で発表された大学でのホール・ランゲージ運動の実践例を紹介し，大学において学習者によるコミュニテイーをつくることについて考えたい。

ホール・ランゲージとは

ホール・ランゲージとはアメリカにおいて伝統的に行なわれてきた形式的な，スキル中心の言語教育にあきたらない教師たちの間から出てきた教育運動である（K・グッドマン，1989，桑原）。言語はまず音と文字の関係，体系を教えることから始めるべきだとするフォニクス（phonics）重視の教育に対して，言語は目的がある（purposeful），実際の（authentic）言語環境のなかで意味のある（meaningful），まとまり（whole）として教えるべきであると主張している（K・グッドマン，1986）。昔からみられる教育におけるヒューマニズムの伝統にピアジェ，デューイ，ロゼンブラット，ハリデイなどによる哲学，心理学，言語学，教育学の研究成

果を統合するものである（K・グッドマン，1989)。ホール・ランゲージは教育理論，教育哲学であって教育方法ではないので実践する教師，支持者でそのホール・ランゲージ観はそれぞれ異なる。教師は科学的理論に基づいて試行錯誤を繰り返しながら自分の生徒にあった教育方法を模索している。

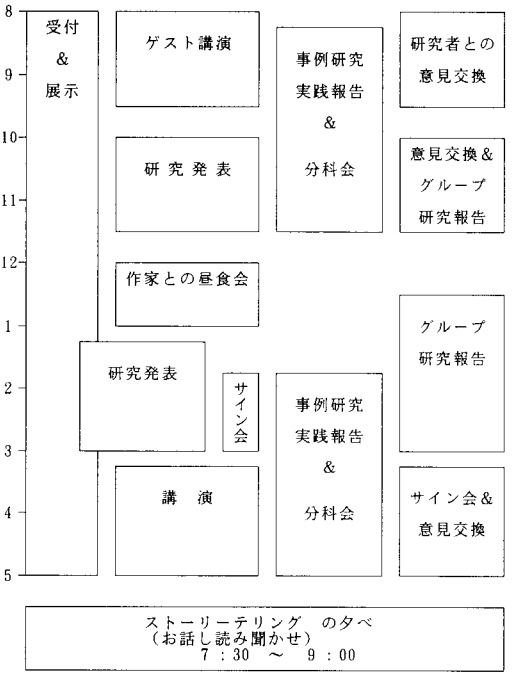
ホール・ランゲージはこれまでの伝統的教育とは学習者に対する視点が大きく違っているといえる。伝統的教育の下では何を教えるか，どう教えるか，どう評価するかという教材，教育方法，評価についてはすべて教師の側に委ねられていた。ホール・ランゲージでは意味のあるという点から生徒自身が読みたいもの，学びたいことを自ら選択する，カリキュラムについて教師と生徒の話し合い，教室における生徒の学習が促進される言語環境作り，生徒自身による自己評価などを多く取り入れている。ホール・ランゲージでは教師は教える人，生徒の上にいる人ではなく，生徒の学習を助長し手助けする人（facilitator)であるとされる。

大学でのホール・ランゲージによる教育実践

この大会では二つの大学（college)でのホール・ランゲージによる教育の実践が報告された。もともとホール・ランゲージは小学校で読み・書きをどう教えるかということから始まったので，小学校での実践例が一番多く大学レベルでの実践はまだまだこれからだといえる。ここでは“Building Caring College Communities”というタイトルがつけられたコミュニテイー・カレッジのリーデイング・ライテイングクラスでの実践例を紹介し，「ケアリング(caring)」な学習コミュニテイーをつくることについて考えたい。

まずケアリング(caring)とはどういうことであろうか。ピーターセン（1992）はケアリングなコミュニテイーの要素としてsupportive, being wanted by others, belonging, acceptance, cobtribution, trust, cooperationなどをあげている。K・グッドマン（1986）は学校は

資料1　プログラム（8月2日金曜日）



生徒が楽しく情熱を持って学べる所でなければならず，そういう場で生徒の学習が一番容易に進むと述べている。「ケアリング」とは個人が学校，クラスというコミュニテイーの一員として暖かく受け入れられ，その中でお互いに助け合いまた必要とされていると感じられる状態であると言える。この実践例ではまず最初の授業で自分の写真と自己紹介文を書いた紙を壁に張りつけ，学生達がお互いをよく知ることから始めている。筆者の留学体験から想像すると多分一週間に二，三度顔を合わせるだけであろう大学の学生達の状況を考えると，この自己紹介法は学習コミュニテイーを作るうえで大切な第一歩といえる。

次に学生達は「アフリカ」というユニットのもと歴史，社会，地理，芸術，文学などの分野から興味のあるテーマを選び，それぞれにリーデイング・ライティング活動をしていく。その活動に学生達が必要とするものは学生と教師で選び，集めて教室に持ち寄る。学生は一回の授業で学んだことをジャーナルにまとめ，教師は各自のジャーナルに目を通しコメントを書くこ

とで学生と相互に交流 (interact)している。また学生達の間にそれぞれの興味ごとにグループができ，グループ内での学生同士の助け合い，意見交換などでより学習が促進される。こうして「アフリカ」単元の最後に「Africa Invitation Day」として各自の成果を発表する。テーマの選択，構成，プロセス，発表 (presentation)を総合して評価がされる。

他にどんな単元 (unit) を設定しているのか，学生が毎週どんなリーデイング・ライテング活動をしているのかなど十分に理解できない所もあったが，日本の短大の英語教育を考える上で参考になる点がたくさんあった。報告の中のスライドで学生が床に座って何か書いている姿，ドラムのようなものを作っている学生，飲み物が用意された発表の日の様子などが紹介された。生き生きとそれぞれの活動に取り組んでいる学生達の表情がとても印象に残った。教師はどう思うだろうか，何か間違いを指摘されるのではないかといった心配，束縛から解放され自由にチャレンジできる雰囲気がまさに「ケアリング (caring)」であると感じた。このようなケアリング・コミュニテイーを教室内に作るためにさまざまなことが要求されるが，特に教師の側の意識改革が必要であることを実感した。

最後に

わずか5日間であったがホール・ランゲージを実践している教師達，研究者達と直に話をする機会を持てたことは大きな収穫であった。特にホール・ランゲージ運動＝ケン&イエッタ・グッドマン博士と言われるそのイエッタ・グッドマン博士と分科会で同席し，日本の短大でいかにホール・ランゲージによる教育を取り入れるか，豊かな言語環境をいかに作るかといった点で話をすることができ，博士の実践からの貴重なアドヴァイスをもらった。「できることはたくさんあるはずよ。とにかくやってみることよ。」と肝っ玉母さんを思わせる博士が熱っぽく語っていた姿が今でも強く心に残っている。最近の学生はやる気がない，学力が落ちたと言われるが，はたして学生の学習が促進・助長されるクラス作りがされているか。早くからテストの点数で輪切りをされ，学ぶ喜びも自信も失ってしまった生徒達に必要なのはケアリングな学習コミュニテイーなのではないかと強く感じた。

参考文献

Goodman, K. (1986), *What's whole in whole language?*. Portsmouth : Heinemann.

Goodman, K. (1989). Whole Language Research : *Foundation and Development. The Elementary School Journal,* 90(2), 207-221.

桑原隆 (1992).『ホール・ランゲージ　言葉と子どもと学習　米国の言語教育運動』国土社

Peterson, R. (1992). *Life in a crowded Place -Making a learning community-*. Portsmouth : Heinemann